

# ■少子化時代の「良妻賢母」

変容する現代日本の女性と家族

スーザン・D・ハロウェイ〈著〉

「良妻賢母」とは、一般に  
慎み深く勤勉で、母性あふれ  
る伝統的な日本の母の理想像  
とされる。だが、この語は明治  
維新後の近代化の中で、人工  
的に作られたイデオロギーで  
あり、今なお形を変えながら  
も文化規範として機能してい  
る。本書は聞き取り調査や先  
行研究をもとに、日本の女性  
たちを拘束するこの「母の理  
想像」に検証を加えている。

もともと「良妻賢母」は、  
愛国的な活動に従事し家庭収  
入も増やしつつ進んで育児も  
し、新しい近代国家建設に役  
立つ女性像と考えられた。だ  
が意味は変質し、公的領域か  
ら女性を排除することと同義  
となり、戦後は専業主婦の増  
加とともに母親の役割の強調  
の意味で用いられるようにな  
った。著者は問う。この文化モ  
デルが真剣に受け止められて  
きたならば、日本は今も子ど  
もがあふれているはずだが、  
現実とは異なるのはなぜか。  
心理学・教育学を専門とす  
る著者は、日本の文化規範と

## 日本の「母」の基準は高すぎる

女性心理との緊密な関係を再  
考し、女性たちの抱える葛藤  
を精査する。国際比較からみ  
れば日本の既婚女性は母親の  
役割へのこだわりが強いが、  
家庭生活への満足度は低い。  
大変きめ細やかな育児を行っ  
ているにもかかわらず、育児  
に自信がなく不安感も高い。  
これは日本の文化規範が求め  
る母親役割の基準が高すぎる  
ことが主たる原因である、と。

興味深いのは少子化対策へ  
の視角だ。育児と就労の両立  
支援はもちろん必要だが、女  
性が仕事に育児にがんばりす  
ぎることが結果的に母の役割  
のハードルを押し上げている  
点にも注意すべきだ。加えて、  
「出生率の低下は、(女性の)結  
婚生活に対する幻滅の反映」  
との指摘は胸が痛い。不満の  
矛先は、心理分析からすれば、  
夫の家事育児の分担不足  
よりも、手伝おうとしない  
「夫の性格」そのものへと向  
かっている、とも。海外からみ  
れば、かくも矛盾だらけな日  
本の妻・母の現状を知り、ぜ  
ひ問題解決の糸口にしたい。

評・水無田 気流

詩人・社会学者

高橋登ほか訳、新耀社・3996円／

Susan D. Holloway 米カリフォルニ

ア大学バークレー校教育大学院教授。

